

日本の高齢者における子どもの数と ソーシャル・サポートの享受

中 田 知 生

日本の高齢者における子どもの数とソーシャル・サポートの享受

中 田 知 生

Tomoo NAKATA

目次

1. 問題の所在と背景
2. データと変数
3. 分析
4. 結果と考察

[Abstract]

Social Support Disparities and the Number of Children among Elderly Japanese People

It is believed that the elderly primarily receive support from their children despite the existence of public services. Therefore, this study purposed to use mixed models to examine the differences in the quantum of social support required by the aged who had children and those who did not. It further scrutinized how the quantum of social support changed with age and number of children. The data for the study were obtained from wave III (1993) to wave IIV (2005) of the National Survey of the Japanese Elderly conducted by Michigan University and Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology. The amounts of emotional and tangible support required were set as the dependent variables. The presence of children, age, gender, education level, and other individual attributes were examined as independent variables. The results revealed that 1) tangible support was most received by the elderly who only had one child; however, the number of children was inconsequential to emotional support; 2) no gender differences were noted; and 3) no significant survey wave interactions were observed. Prospective studies should examine the sources of support for the elderly who do not have children and inspect effects such as hidden bias.

1. 問題の所在と背景

本研究の目的は、高齢者が受け取るソーシャル・サポートに関して、子どもの数とそれを享受する量の関係を検証することである。ソーシャル・サポートは、個人のネットワークを通じて得られる資源である。精神的/肉体的健康に対して効果を持つと言われ、これまでその研究が続けられてきた(中田2020)。

ソーシャル・サポートについては、さまざまな定義があることはよく知られている。た

とば、Kahn and Antonucci は、ソーシャル・サポートを「1つ以上の次のキー要素を含む個人間のかかわりの表現：情愛 (affect), 肯定 (affirmation), 援助 (aid)」とする。ここにおいて、情動とは、愛好 (liking), 敬愛 (admiration), 尊敬 (respect), もしくは愛 (love) であり、肯定とは、他の個人のある行動や言葉の妥当性もしくは公正さの同意や承認の表現であり、そして、援助とは、物、お金、情報、時間、資格付与を含む、与えられた直接的な援助(aid)や手伝い(assistance)であると説明している(1980)。そのなかで、

キーワード：ソーシャル・サポート, 子どもの数, パネルデータ, マルチレベル混合効果モデル
Key words: social support, the number of children, panel data, multilevel mixed-effects models

その分析においては、その機能から分類することがひとつの慣例となっている。その機能による分類において、多く用いられているのは、情緒的サポートと道具的サポートである。前者は、他者による受け入れや価値付け、賞賛を受ける、傾聴、共感、アドヴァイス、会話をするなどを含むために、自己肯定感の向上につながる観念 (Wills 1985) であり、後者は、物質的サポート (material support) とも呼ばれる。家事援助を供給する、子どもの世話をする、お金を貸したり提供したりする。使い走りをする、足となる。ある用事をする (大工仕事、配管)、留守番をする、家具・道具・本などの物を提供する、という行動をすることを含む概念であるために、労力や時間を節約することができるので幸福、物質満足度を上げる (Wills 1985)

ところで、日本型福祉の特徴として、大沢 (1993) は、政府は、結果の平等は求めない、ハンディキャップを持つ場合しか、救済しない、リスクは、個人や、その家族が負担することを挙げている。すなわち、わが国におけるケアは、家族、そして市場などを通じて企業から提供されるものが大きいことを示している。その後、2000年に、介護保険が導入された。これは、もちろん、それらの高齢者のケアを社会で担うべく作られた制度である。しかし、これまでの分析においては、まだまだ、高齢者に対するケアは家族から供給されるものに依存しているようにも思える。では、その問題点を明らかにしよう。

まず、日本における少子化と無子化の実態である。たとえば、日本の合計特殊出生率は、第二次ベビーブーム (1971-74) から減り続けているし、子どもを持たない夫婦は、全体の半数に迫ろうとしている。表1は、夫婦がいる一般世帯に占める子どもがいない世帯の割合、合計特殊出生率、そして、完結出生児数の表である。まず、合計特殊出生率は、やや一貫していない。これは、夫婦が将来子ど

もを産むにせよ、その計画のなかで、その状況などに左右される可能性があるからであろう。たとえば、それは景気の動向などにより変わってくる。しかし、前述したとおりに、長いスパンで見た合計特殊出生率は、第一次ベビーブームの1949年の4.32以降下がり続け、第二次ベビーブームの1972年、1973年は、2.14と持ち直したが、それ以降は、はっきりと下がり、近年ほんのわずかに増えたものである。完結出生児数は、結婚から15～19年夫婦の平均出生数を表したもので、実際の夫婦の子ども数といわれている。これは、第1回調査の1940年の4.27以降、やはり下がり続けている。1970年代から80年代には、2.2人あたりを上下したが、2010年以降は、1人台となった。そして、最後に、夫婦がいる一般世帯に占める子どもがいない世帯の割合は、日本における無子化を表したものである。ただし、ここには、夫婦の高齢化、子どもの喪失などの要因が含まれていると思われるために、この数字を無子化の趨勢とすると、それを過大評価することになるかもしれない。しかし、子どもがいない夫婦がかなり急激な勢いで増えていることも見て取れるであろう。

他方で、高齢者が、どの程度、ソーシャル・サポートの提供先として、子どもに依存しているかを考える必要がある。これに関しては、以前から検証されてきた。たとえば、野辺 (1999) は、岡山県での調査データを用いて、女性においては、主として子どもからサポートを受ける。他方で、男性は、配偶者、

表1 日本における子どもに関する統計¹⁾

	1985	2000	2015
子どもがいない世帯割合	22.8	34.2	41.0
完結出生児数	2.19	2.23	1.94
合計特殊出生率	1.76	1.36	1.45

ただし、完結出生児数の1985年データは1987年に、2000年データは2002年に収集されたものである。

すなわち、妻からサポートを享受することを示した。パネルデータを用いた検証については、拙著（2020）において、サポートの提供先が、年齢とともに、配偶者や子どもに収斂していくことを明らかにした。ただし、情緒的サポートにおいては、少数であるが、一部で、友人などにサポートを求めたり、あるいは、道具的サポートについて、ごく少数の高齢者は、家族外、特に、専門家やケアワーカーなどにそれを求めることが見て取れた。

これらは、家族のなかで、親世代の資源となる子どもを持たないリスクを、ある意味、表しているといえる。ただ、問題は、それが本当かということである。また、子どもの持たない高齢者は、他にサポートを求めることはできないのか、そして、その量は少なくなるのであろうか。他方で、これは、家族の問題でもある。もしかすると子どもの数が少ないほど、その子どもが、親の扶養意識が高くなるかも知れない。また、同様に、育てられている期間に親の資源が集中するという意味でもその可能性がある。本研究においては、それをパネルデータを用いて検証する。

2. データと変数

本研究においては、「National Survey of the Japanese Elderly（老研—ミシガン大学全国高齢者パネル調査）」のウェーブ I（1987年収集）、II（同1990年）、III（同1993年）、IV（同1996年）、V（同1999年）VI（同2002年）、VII（同2005年）を用いた²⁾。このデータは、東京都老人総合研究所とミシガン大学が共同で行った日本の高齢者を対象としたパネル調査である。調査対象者は、全国の60歳以上の男女で、第1回調査においては1832名の有効回収票を得た。

従属変数は、情緒的サポートと道具的サポートの量をそれぞれ用いた。これらは、それぞれの下位尺度から測定されており、たとえ

ば、情緒的サポートであれば、「傾聴者がいる」と「いたわってくれる人がある」、道具的サポートであれば、「病気の世話」、「経済的援助」、「日常的に手助けしてくれる人」で、それぞれがいれば、1点を与え、前者は2点満点、後者は、3点満点となっている。また、独立変数は、子どもの数、年齢、ジェンダー、教育レベル、および健康状態を用いた。子どもの数は、「子どもがいない」、「子どもが1人だけいる」、「子どもが2人以上いる」の3つのカテゴリに分類した。教育レベルは、公教育の年数、そして、健康状態は、自己評価による健康の5段階評価によって測定した。

ここでは、マルチレベル混合効果モデル（Multilevel mixed-effects models）を通じて、時間の経過に伴う子どもの数のサポート量の変化を比較した。分析には、Stata16を用いた。

3. 分析

まず、表2は、プールされたデータ、すなわち、ここで用いるパネルデータにおけるすべてのウェーブを合併した時のソーシャル・サポートと、用いるいくつかの属性の単純集計である。①の情緒的サポートと②の道具的サポートは、0、すなわち、ソーシャル・サポートが享受されていない状態がいない状態が極めて少なく、また、満点に偏った分布となっている。また、子どもの数は、子どもがいない調査対象者は、全体の3分の1であり、半数以上には、2人以上の子どもがいることが示されている。

では、実際の分析に入ろう。まずは、情緒的サポートの分析である。結果は、表3に示した。モデルにおいては、上記の独立変数の主効果の他に、調査ウェーブと子どもの数、調査ウェーブとジェンダーとの交互作用を検証している。これは、後に触れる道具的サポートも同様である。これらは、まず、ここでの中心的な変数としての子どもの数が、ソー

シャル・サポートへ影響するか、特に、加齢していくほどどうなるかという興味がある。そして、ジェンダーについては、先行研究でも見られたように、日本においては、男性と女性では、サポートの供給の経路なども異なる。その変化についても、ジェンダーで差異が生じている可能性もある。

まず、この分析の結果を主効果から見てみると、健康が高いほど、情緒的サポートが多いことが見て取れる。これは、健康が高いとネットワークの拡張に影響を与えるからだろう。教育年数も、近似的にそのように読み取ることができる。しかし、性別と年齢については、有意な効果がなかった。同様に、子どもの数も、有意な効果が見て取れなかった。これは、情緒的サポートの特質から見ても、当然かもしれない。情緒的サポートは、だれからでも、そして、いつでも享受できるサポートといえるからである。

分析中の2つの交互作用項に効果については、図によって示した。図1が調査ウェーブと子どもの数の交互作用の推定、図2が調査ウェーブとジェンダーと交互作用の推定であ

る。子どもの数との交互作用は、図からは、若干子どもの数が多いほど受け取るサポートの量が高くなるようにも見える。しかし、いずれも有意な効果はなかった。ジェンダーとの交互作用については、いくつかのウェーブで女性は男性よりも多くサポートを享受していることが見て取れる。たとえば、基準となっている、第3ウェーブと比較して、第4ウェーブと第7ウェーブがそうである。ただし、年齢が上がるほどそうなるという、年齢との関係での一貫した効果は見られなかった。

続いて、道具的サポートである。この分析の結果は、表4に示した。主効果から見ていくと、まず、年齢と健康が有意となっており、年齢が高いほど、そして、健康状態が良いほど、多くの道具的サポートを受け取れることがわかる。そして、情緒的サポートでは、有意な効果がなかった子どもの数については、「子どもなし」カテゴリーよりも、「子どもひとり」カテゴリーの方が有意に高い値となっている。ここで興味深いのは、「子どもが2人以上」のカテゴリーは、「子どもなし」より有意に高くない。すなわち、子どもがいる

表2 主要変数の単純集計表（プールされたデータ）

①情緒的サポート

	頻度	割合
0	375	1.25
1	960	3.2
2	28,615	95.54
計	29,950	100.00

②道具的サポート

	頻度	割合
0	60	0.20
1	823	2.75
2	3,244	10.83
3	25,823	86.22
計	29,950	100.00

③子供の数

	頻度	割合
0	25,817	31.73
1	4,605	5.66
2-	50,953	62.6
計	81,375	100.00

④ジェンダー

	頻度	割合
男性	6,965	45.23
女性	8,435	54.77
計	15,400	100.00

ほど、多いサポートを受けることができるが、子どもが多いほど多くのサポートを受け取れるわけではないことである。これは、前述したとおりに、一人っ子の親の扶養へのプレッシャーなのか、あるいは、子どものころに親からの多くの資源が投入されたためなのかはわからないが、そのようなメカニズムが働いていることも考えられる。そして、最後に、ジェンダーとは、関連がなかった。

しかし、図3の調査ウェーブと子どもの数との交互作用に関しては、有意なものはない。すなわち、子どもの数の効果は、主効果のみで、年を取ることは関連がないことがわかった。また、図4のジェンダーとの交互作用項についても同様の結果であった。図では女性が多く享受しているようにみえるが、有意な効果ではなかった。

表3 情緒的サポートの混合効果モデル

	係数	標準誤差	95%信頼区間	
調査ウェーブ	3	(reference)		
	4	-.165	.045	-.254 -.077
	5	-.013	.032	-.076 .050
	6	-.035	.036	-.107 .036
	7	-.340	.172	-.679 -.001
子どもの数	0	(reference)		
	1	.005	.021	-.036 .047
	2	.024	.184	-.337 .386
ウェーブ#子供数				
	4 1	.061	.060	-.057 .180
	4 2	.129	.188	-.239 .499
	5 1	-.013	.046	-.104 .077
	5 2	.010	.186	-.355 .375
	6 1	.049	.050	-.049 .147
	6 2	.051	.187	-.315 .418
	7 1	-.023	.305	-.623 .575
	7 2	.143	.287	-.419 .706
ジェンダー	男性	(reference)		
	女性	.033	.022	-.010 .077
ウェーブ#ジェンダー				
	4 2	.063	.030	.003 .123
	5 2	-.015	.032	-.079 .048
	6 2	-.017	.036	-.087 .053
	7 2	.322	.185	-.040 .685
年齢		-.000	.001	-.003 .002
教育年数		.005	.003	-.000 .011
健康		.024	.006	.011 .037
切片		1.725	.114	1.501 1.949
n		4550		
グループ数		1642		
ワルド X2		162.10 (P<0.01)		

表4 道具的サポートの混合効果モデル

	係数	標準誤差	95%信頼区間	
調査ウェーブ	3	(reference)		
	4	-.113	.059	-.230 .004
	5	-.159	.042	-.244 -.075
	6	-.138	.048	-.234 -.043
	7	-.659	.230	-1.112 -.206
子どもの数	0	(reference)		
	1	.103	.028	.047 .159
	2	.339	.245	-.140 .820
ウェーブ#子供数				
	4 1	.014	.080	-.143 .172
	4 2	-.193	.250	-.683 .297
	5 1	-.071	.061	-.192 .048
	5 2	-.213	.247	-.699 .272
	6 1	-.044	.066	-.175 .086
	6 2	-.230	.248	-.717 .256
	7 1	-.054	.406	-.850 .741
	7 2	-.431	.382	-.318 .182
ジェンダー	男性	(reference)		
	女性	.021	.030	-.039 .081
ウェーブ#ジェンダー				
	4 2	.025	.040	-.052 .104
	5 2	.032	.042	-.051 .115
	6 2	.002	.047	-.089 .095
	7 2	.292	.246	-.191 .775
年齢		.008	.001	.004 .012
教育年数		-.006	.004	-.015 .001
健康		.058	.008	.040 .075
切片		1.825	.161	1.508 2.142
n		4550		
グループ数		1642		
ワルド X2		162.10 (P<0.01)		

ただし、子ども数は、「0」が「0人」、「1」が「ひとり」、「2」が「2人以上」、ジェンダーは「1」が「男性」、「2」が「女性」である

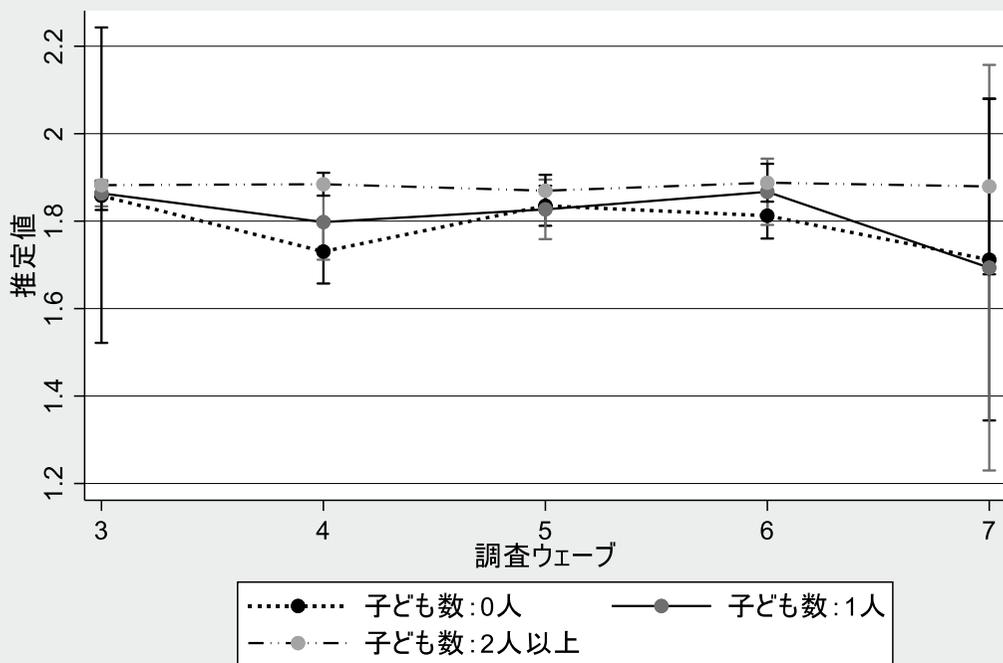


図1 情緒的サポートの調査ウェーブと子ども数の交互作用の推定値

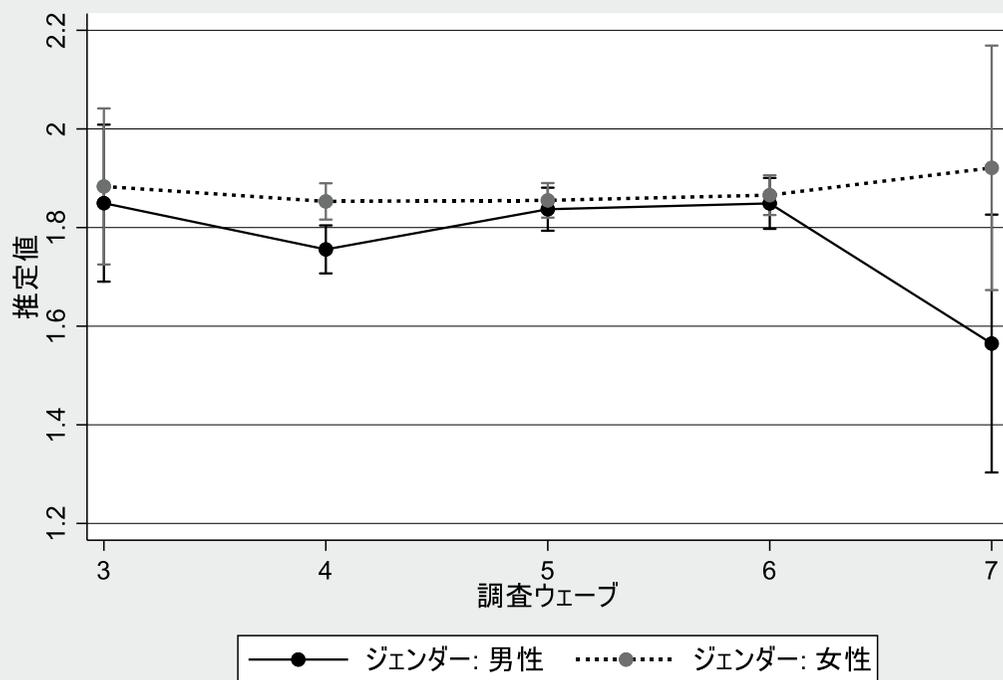


図2 情緒的サポートの調査ウェーブとジェンダーの交互作用の推定値

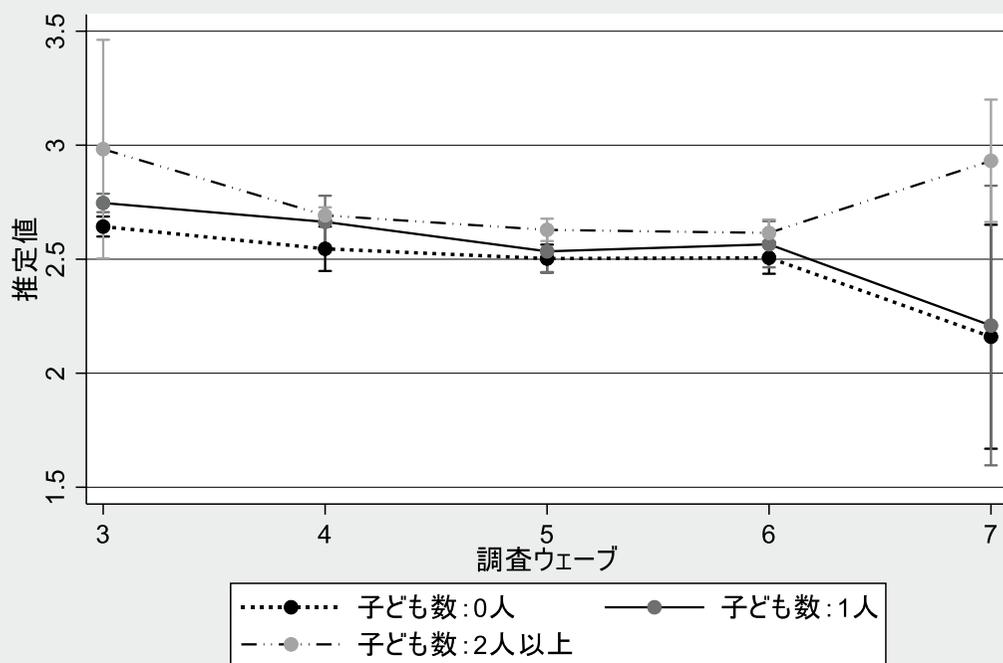


図3 道具的サポートの調査ウェーブと子ども数の交互作用の推定値

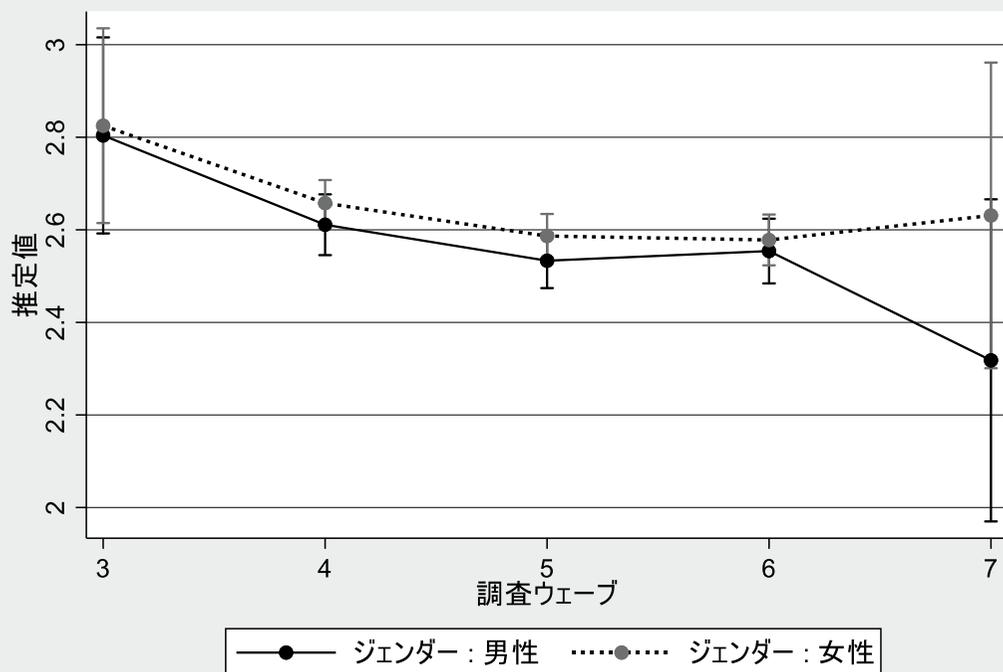


図4 道具的サポートの調査ウェーブとジェンダーの交互作用の推定値

4. 結果と考察

本研究においては、高齢者が受け取るソーシャル・サポートの量と子どもの数との関連を検証してきた。結果としては、特に、道具的サポートにおいて、「子どもなし」よりも子どもがいる方が、サポートの量が多いことが見て取れた。しかも、子どもが2人以上よりも、ひとりしかいない親の方が多くのサポートを享受していることが分かった。他方で、情緒的サポートについては、子どもの数は、関連がなかった。これらは、1) それぞれのサポートの特質、すなわち、情緒的サポートは、家族以外からも提供可能であるが、道具的サポートは、時間や労力、お金がかかる可能性があるため、家族以外からの提供はより困難であること、そして、2) 家族内での関係、一人っ子の方が、子ども時代に集中して親からの資源を受けることができ、また、扶養義務感が強くなる、あるいは、親世代において、一人っ子であると、ソーシャル・サポートの受領認知が強くなるなどのことと関連があるのではないだろうか。

他方で、ジェンダーについては、あまり有意な効果がなかった。もちろん、どのような性別でも、公正に受け取っているということであれば、まったく社会的問題は発生しないが、ソーシャル・サポートは、享受者の認知の問題である(中田 2020) ために、受け取る量とその評価についての議論から始めなければならないかも知れない。

また、最後に、前述のような家族内の問題としてこの問題を扱うのであれば、ここで用いた子どもの数という事実としての変数と、たとえば、ソーシャル・サポート・システムの「重要な他者」概念(中田 2020) のような認知の問題がどのように関わっているかなど、今後の課題となるだろう。

〔謝辞〕

分析で用いたデータは、ミシガン大学 Inter-university Consortium for Political and Social Research および、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「老研 - ミシガン大 - 東大 全国高齢者パネル調査 (National Survey of the Japanese Elderly)」の個票データの提供を受けました。記して感謝申し上げます。

〔注〕

- 1) 「夫婦がいる一般世帯に占める子どもがいない世帯の割合」は、『国勢調査』を、「合計特殊出生率」は、『人口動態統計』(厚生労働省)を、そして、「完結出生児数」については、『出生動向調査』(国立社会保障・人口問題研究所)を参照した。
- 2) 当該調査については「JAHEAD 全国高齢者調査公式サイト」(<http://www2.tmig.or.jp/jahead/index.html>)を参照のこと。この調査は現在も引き続き行われているが、第1回から第4回調査までの調査データに関してのみ、ミシガン大学の ICPSR (Inter-University Consortium for Political and Social Research) もしくは、東京大学社会科学研究所の SSJ データアーカイブにおいて公開されている。

〔参考文献〕

- Kahn, R. L. and Antonucci, T. C., 1980, "Convoy over the life course : Attachment, roles and support". In P. B. Baltes & O. G. Brim (Eds.), Life-span development and behavior. Vol. 3. Academic Press. 253-286. (東洋・相木恵子・高橋恵子編集・監訳, 1993, 「生涯にわたるコンボイ」『生涯発達心理学第2巻気質・自己・パーソナリティ』新曜社: 33-70)。
- 中田知生, 2002, 『高齢期における社会的ネットワーク-ソーシャル・サポートと社会的孤立の構造と変動-』明石書店。
- 野辺政雄, 1999, 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違い」『社会学評論』50 (3): 375-392。
- 大沢真理, 1993, 『企業中心社会を超えて』時事

通信社。

Wills, T.A., 1985. "Supportive Functions of Interpersonal Relationship" in S. Cohen and S. L. Syme(eds.) Social Support and Health, Orlando: Academic Press: 61-82.

